

第四号「地方都市の社会構造」

の特集に際して

一、「経済と社会」の第三号が昭和四十三年に刊行されて以来、すでに七年が過ぎている。この間、次号が出されなかったことには二つの理由がある。一つは昭和四十四年に起きた東京女子大学における「大学紛争」がかなり烈しく、その際表面化した本学のかかえる問題の整理に関心が向けられたまま、本誌の企画編集体制が崩れてしまったことである。もう一つは、本誌出版のための財政的基盤がほとんど解体したまま再建できなかったことである。この二つの理由は現在でもほとんど変わっていないといつてよく、とくに財政的基盤については日本のインフレの進行にともなう出版費の高まりの中で暗中模索の状態にあるといえよう。

それにもかかわらず、第四号をここに出版する運びになったのは、東京女子大学学会の部会費を積立てて、ほぼ出版費の七割の財源が確保できたことと、次に述べる調査の成果を一部でも世に問いたいという要望からであった。

二、本特集は、昭和四十五年度・四十六年度に文部省の科学研

究費の助成を受けて実施した調査結果の一部の分析を通してまとめられたものである。助成を受けた研究課題は、地方都市における「社会構造と社会保障」で社会構造についての分担課題は次のとおりであった。

地方都市の社会構造

- | | | |
|-----------|------------|-------|
| 1 | 資本の性格と企業組織 | 宮川 実 |
| 2 | 労働者の生活構造 | 鎌田とし子 |
| 3 | 周辺農村の社会構造 | 山本 英治 |
| 4 | 自治と市民組織 | 古屋野正伍 |
| 地方都市の社会保障 | | |
| 1 | 社会福祉の実態 | 副田 義也 |
| 2 | 福祉行政と社会保障 | 山手 茂 |

研究の目的は、昭和三十年以降のわが国の重化学工業化の進行にともない地場産業を基盤に成立していた地方都市の相対的独自性が急速に失われつつ、社会構造も大きく変化し、社会生活にもさまざまな歪みが生じてきている実態を把握し、分析することにあつた。その研究を進めるために調査地を首都圏と近畿圏に関連する繊維工業都市に定め、埼玉県秩父市と京都府福知山市を昭和四十五年に、長野県上田市と福井県福井市を昭和四十六年に調査したのである。

この特集はこの研究の社会構造の部分、それもそれぞれの課題の一部の分析であるが、当初の編集企画としては担当者の四人が執筆する予定であつた。しかし経費の関係と小生の学校行政での多忙とによって、資本に関係する部分が欠如してしまつ

た。いわば対象地方都市の具体的性格の部分が欠落したわけ
で、他の三論文との関係で穴があいた形となってしまったこと
は申しわけない次第である。ここでは、繊維工業都市の戦後段
階における問題を簡単に整理しておきたい。

三、わが国の資本主義の発展過程の中で、主として、第二次世
界大戦前までの段階では、資本の再生産構造が繊維工業部門を
基軸にして展開していたことはすでに山田盛太郎氏等によって
指摘されてきたことであるが、わが国の工業都市を考える場
合、とくに地方都市を考察する場合、この視点は重要視される
べきものであろう。戦前までの繊維工業都市に代表されるよう
な消費財生産部門の、しかも地場資本を主体にした生産を基盤
にして成立発展してきた地方都市は、戦後における重化学工業
を軸にした再生産構造への転換と、それにもなう繊維資本の
再編成の中で、当然、急激な経済的社会的再編成を迫られてき
た。

繊維工業における原糸―紡績資本の巨大化は、全国の繊維資
本の系列化・下請化を進めるとともに、化学繊維・合成繊維の
開発にもなつて、生産体系も大きく変え、地方の繊維工業都
市の中小地場資本を「近代化」「合理化」の中で再編成してき
ている。このことは、地方繊維工業都市の中小資本家のみなら
ず、直接生産者としての繊維工場労働者や農家その他の副業的
家内工業従事者、さらには整理・染色等の企業・労働者等を含
める労働力の再編成を意味している。

こうした巨大資本による地方都市の資本と労働力の再編成
は、当然のことながらその地域一帯の基本的階級関係の変化を
惹き起し、その中で、地方都市の政治権力関係から日常的社
生活面での社会関係にいたるまでの構造的変化を惹き起してき
ている。また住民諸階級諸階層の意識や生活様式を変えてきて
いるものと思われる。しかし一方こうした巨大資本による地方
繊維工業都市経済社会の再編成は、ただ繊維巨大資本によるも
のだけではない。繊維工業自体、重化学工業化と発展途上国の
繊維生産の高まりの中で「斜陽化」が見られ、日本全体の再生
産構造の中での矛盾を受けとめつつあり、一方、重化学工業化
の全国的配置が進められる中で、工業立地の再編成が進めら
れ、地方都市の重化学工業化も進行してきている。ここでは繊
維資本以外の工業資本が進出し、労働力構成の側面でもそうし
た労働力部分の占める割合が大きくなつてきている。その意味
では地方繊維工業都市は、巨大繊維資本による再編成とともに
直接的にも重化学工業資本の再編成過程の中にあるといえよ
う。いうまでもなく、その再編成からはずされた地方都市は次
第に衰退し、過疎都市化するわけであるが、再編成される地方
都市が必ずしも明るいものである保障はない。むしろ巨大資本
の論理の中で多くの歪みや矛盾を生み出してきており、そこ
には当然のことながら、抵抗や抗議や要求のための意識・行動・
運動が生じ、組織されてきている。

(宮川記)